司馬遼太郎とゆく
～オランダ・ベルギーの旅～

街道をゆくシリーズは72街道を旅する

長女が大学で教えるようになってからは、私が海外旅行に行く際は事前に訪れる国のガイドブックやその国に関連する本を送ってくれる。彼女は学生を連れて海外研修に出かけることが多く、事前の知識が旅をより豊かなものにしてくれることを体感しているからであろう。

今回のオランダ・ベルギーの旅でも数種類のガイドブックと司馬遼太郎の「オランダ紀行」を送ってくれた。

司馬遼太郎といえば、数年前、NHKテレビドラマで見た「坂の上の雲」を全巻買い求めた。歴史小説の第一人者、彼の書く紀行文は味わい深い。「オランダ紀行」という題だが、隣国、ベルギーにも触れており、かなり参考にさせてもらった。新年から書く「オランダ編」でも役立てようと、今、改めて読んでいる。

「坂の上の雲」以外に我が家にもう一冊、司馬遼太郎の本があったように思われ、本棚を探す。やっと見つけたのが「南蛮のみち」である。

南蛮とはスペイン、ポルトガルのことだ。八年前、サビエル生誕五百年を記念して、スペイン、ポルトガルを旅し、それがこの巡礼記を書くきっかけとなった。多分、その際に求めたものだろう。

今回送られて来た「オランダ紀行」と「南蛮のみち」が関係あるとは当初思ってもいなかった。実はこの二冊は司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズ、全四十三巻の一部だったのである。

娘に電話でそのことを話すと、インターネットで調べながら「『オランダ紀行』は旅行に持っていくかもしれないから文庫本を手配したが、もっと読みやすいワイド版がある。街道をゆくシリーズは『愛蘭土（アイルランド）紀行』や『モンゴル紀行』など安価でたくさん出ているので、グラビア版の『街道をゆく』と一緒に送るように手配します」と言う。

数日後、アマゾンなどから次々に送られて来る。驚いたのはその値段である。本代一冊一円、送料を加えても三百円にもならないものがかなりある。ほとんどが新品だ。どういう流通機構になっているのかわからないが、これでは街の本屋さんがつぶれてしまうのも当然である。

話が横道にそれたが、安い海外ツアーでも、娘から事前に送ってくる本のお陰で実り豊かな旅になっていることは間違いない。

「オランダ紀行」が街道をゆくシリーズであることを知り、司馬遼太郎とともにゆく旅になった気持ちになる。

司馬は数々の歴史小説や紀行文を残した。それは過去の歴史は単なる出来事ではなく、その歴史の積み重ねの上に、今、自分が生きていることを考えよと問いかけられているようにも思えた。

司馬も訪れたブリュッセルのグランプラス広場で